

大阪大学外国語学部ウルドゥー語研究室紹介



海外交流

萬 宮 健 策*

Introduction of department of Urdu, Osaka University

Key Words : Urdu, Modern Indo-Aryan, Islam, Pakistan, South Asia

大阪におけるウルドゥー語研究・教育

大阪におけるウルドゥー語教育・研究の歴史は、1921年の大阪外国語学校印度語部開設に始まる。同語部は、1944年大阪外事専門学校インド科と改称され、1949年の大阪外国語大学インド語学科開設へと続く。この「印度語」や「インド語」は、ウルドゥー語をも指している。たとえば1943年に第一版が出版された「インド語四週間」(木村一郎著・大学書林)にはHindostānī(ヒンドウスターニー)という名称が用いられており、ウルドゥーの同義語として扱われている。「インド語」や「ヒンドウスターニー語」をウルドゥー語と全く同一言語であると定義することはできないが、上掲書では文字もアラビア文字のみが挙げられており、実質的には現在のウルドゥー語のことを指していると考えて差し支えないだろう。

一方、東京では大阪より少し早くその歴史が始まった。東京外国語学校にヒンドスターニー語科が開設されたのは1908年のことである。2008年12月には東京外国語大学でインド・パキスタン語学科開設100周年が祝われ、国際シンポジウムが開催された。

大阪外国語大学インド語科は、1966年にインド・パキスタン語学科と改称されたが、前述のとおり「インド語」や「パキスタン語」という個別言語はなく、

それぞれ実際にはヒンディー語、ウルドゥー語を指している。

現在のウルドゥー語専攻は、日本人教員3人とパキスタンからの外国人招聘教員1人の計4人が担当している。それに対し2008年度以降の入学定員は18人である。長く豊かな伝統を有するウルドゥー文学、南アジアのイスラーム、社会言語学など、それぞれが専門を活かしつつ、研究および教育に携わっている。

これまでに在籍した研究者の優れた業績もいくつか挙げさせていただく。2005年4月には、加賀谷寛先生(大阪外国語大学名誉教授)によりウルドゥー語辞典(ウルドゥー語→日本語)が出版された。この辞典には、見出し語だけで1万8000語が挙げられており、大阪大学のみならず日本におけるウルドゥー語研究・教育における非常に大きな成果である。また同年10月にはタバススム・カシミリー先生(元大阪外国語大学外国人教師)が国際交流奨励賞(日本研究賞)を授賞された。加賀谷寛・濱口恒夫(大阪外国語大学名誉教授)両先生による「南アジア現代史Ⅱ」(山川出版社)も、パキスタンやバングラデシュの歴史を学ぶ上で不可欠な著作である。これだけを見ても、ウルドゥー語研究室は日本におけるウルドゥー語・南アジア研究に大きく貢献してきていると言えよう。



* Kensaku MAMIYA

1965年6月生

パキスタン国立スィンド大学大学院哲学修士課程修了(1992年)

現在、大阪大学世界言語研究センター
アジア言語文化圏研究部門Ⅲ(ウルドゥー語専攻)講師 哲学修士(M.Phil) 現代
インド・アーリア諸語

TEL : 072-730-5297

FAX : 072-730-5297

E-mail : k-mamiya@world-lang.osaka-u.ac.jp

ウルドゥー語とは？

日本でなじみのある言語名は、その言語が話されている国や地域名が冠されていることが多く、言語名を聞くと良くも悪くもそれなりのイメージが頭に浮かぶことが多い。しかし「ウルドゥー語(Urdu)」と聞いても、それがどこで話されているどんな言語なのかをイメージしにくい。ウルドゥー語は、パキスタン憲法が「国語(national language)」と定めて

いる言語であり、同時にインドでも重要¹⁸言語の1つに数えられている。

パキスタンや南アジア各地のムスリム（イスラーム教徒）の接続言語（link language）としての役割も看過できない。パキスタンをはじめとする南アジア諸国はいわゆる多民族多言語国家の集合である。こうした国々では、多くの民族がそれぞれ自らの言語や文化を有しており、ほとんどのことが日本語のみで事足りる日本とは言語環境が大きく異なる。ウルドゥー語はパキスタンにおいて、国語であると同時に接続言語としても機能している。約1億6000万人（2008年央推計）を数えるパキスタンの総人口のうち、ウルドゥー語を母語として話しているのはわずか7%程度に過ぎず、残りの93%は自分の母語とウルドゥー語の2言語併用生活を送っている。つまり、ほとんどのパキスタン人にとってウルドゥー語は母語ではないが、日常生活には全く支障がない程度のウルドゥー語運用能力も有している。そのため、パキスタンではどこへ行ってもウルドゥー語が通用する。また都市部では、これに公用語でもある英語が加わり、3言語を使い分けて生活するものも多い。インドに居住するムスリムの多くもウルドゥー語を日常生活に用いており、南アジア地域に限っても使用者人口は数億人を数える。

ウルドゥー語は、日本語を母語とするものにとっては習得が比較的容易である。その理由の1つに、語順が日本語とほぼ同一であることが挙げられる。短文であれば、日本語で考えたとおりの順序で語彙を並べると通じることが多い。また発音についても、母音については「ア、イ、ウ、エ、オ」の5つが共通しており、「カタカナ発音」でも理解される場合が多い。ただし厳密に比較すると、ウルドゥー語では有気音（aspirated sounds）と無気音が区別されるほか、反舌音（retroflex sounds）と呼ばれる音があり、正確な発音はなかなか難しい。

ウルドゥー語の表記にはアラビア文字が用いられる。アラビア文字は本来アラビア語の表記に用いられる²⁸文字を指すが、ウルドゥー語表記に用いられる文字は、ウルドゥー語特有の音やペルシア語からの外来音を表す文字が加えられた計³⁶文字からなるアルファベットである。アラビア語がナスフ体という書体を用いるのに対し、ウルドゥー語ではナスターリーク体という書体を用いることが多い。

右上から左下に向かって流れるように書かれるのが特徴である。この文字は原則として短母音を表記しないため、発音する場合に困難を生じる場合がある。上述のとおり、日本人にとってウルドゥー語の発音や会話は比較的容易だが、読み書きに関しては、この文字のため、慣れるのには時間がかかる。

言語学的には、インド・ヨーロッパ語族のうち現代インド・アーリヤ諸語に属する。ヒンディー語（インドの連邦公用語）や、もと東パキスタンであったバングラデシュのベンガル語は姉妹関係にある。なかでも、ヒンディー語とウルドゥー語は、言語学的な観点に立てば非常に近い関係にあり、日常会話レベルでは意思疎通が可能な場合がほとんどである。たとえば、「お元気ですか？ 今日暑いですね」といった会話の場合、パキスタンではそれがウルドゥー語として認識され、インドではヒンディー語として認識される。ただし、ヒンディー語はデーヴァナーガリー文字を用いて表記するため、話は通じてても文通はできない、ということになる。また、ウルドゥー語話者にはムスリムが多く、ヒンディー語話者にはヒンドゥー教徒が多いことも、両言語間の語彙の違いの一因となっている。ウルドゥー語とヒンディー語には共通点も多いが、同時にインド亜大陸がたどってきた歴史や政治が深く関わっており、実際には両者の関係は非常に複雑である。

シンタクスの観点からウルドゥー語の特徴として挙げられるのは、能格構造であろう。能格（ergative）とは、前述したように動詞が主語の性・数に対応して変化するのではなく、直接目的語の性・数に応じて変化するという構造である。たとえば、「彼は、私に本をくれた（us ne muj^he kitāb dī.）」という文を考えてみる。

（us（彼：3人称単数代名詞後置格）ne（は：能格後置詞）muj^he（私に：1人称単数代名詞与格）kitāb（本：女性名詞単数主格）dī（くれた：他動詞単純過去女性単数形））

この文では動詞 dī は、本という直接目的語の性・数に合った形となっている。同一文中で、主格となる名詞は1つに限定されるため、意味上の主語である「彼」には後置詞 ne が付加されて後置格形となる。誰がくれたか、という点よりも、何をくれたか、という点に重きが置かれる、と考えるとわかりやすい。

パキстанは危険か？

大阪で約 90 年にわたって教育・研究が続いているウルドゥー語であるが、上述のとおり、この言語が話されている地域とともに、日本ではあまりなじみがなかった言語である。しかし、1998 年 5 月の核実験実施や、「9.11」のため、日本でもパキстанに関する情報が増え始めた。日本でそうした情報に接していると、パキстанをはじめとする南アジアのムスリム多住地域は、テロリストが潜んでいる非常に危険な地域というイメージを抱きがちとなる。確かに、国内ではさまざまな事件が発生しており、政情不安は事実である。

一方でパキстанは、いわゆるインド世界と中央アジア世界が会おうという、地政学や歴史の観点から見ても、興味深い場所に位置している。国土の中央をインダス河が流れ、インダス文明を育んだ豊かな大地が広がっている。人なつっこく面倒見のよいパキстанの人々と接していると、日本での報道がまるで別世界のことのようにも思えてしまう。パキстанをはじめとするウルドゥー語が用いられている南アジア地域と日本との関係は今後も深まっていくだろうが、ウルドゥー語研究室が、この地域や居住する人々を正しく理解する一助となれば、と願っている。

شعبہ اردو، جامعہ اوساکا کا مختصر تعارف

اوساکا میں اردو کی تدریس و تحقیق کا آغاز کوئی ۹۰ سال پہلے یعنی ۱۹۲۱ء میں ہوا تب سے یہ جاہاں میں اردو اور جنوبی ایشیا کے مطالعات کا ایک اہم مرکز رہا ہے۔ کان کاگایا صاحب کی مرتبہ اردو جاہانی لغت، جو ۲۰۰۵ء میں شائع ہوئی، اس کا ایک نمونہ ہے۔ فی الحال اسی شعبے میں ۳ جاہانی اساتذہ اور ایک اردو دان، جو پاکستان سے تشریف لائے ہیں، موجود ہیں۔ اور ہر سال ۱۸ طالب علموں کو داخلہ مل جاتا ہے۔ ۴ سال کے بی اے کے کورس کے دوران اردو کے حروف تہجی سے شروع ہو کر گفتگو، مضمون نگاری، جنوبی ایشیا کی تاریخ اور ادب کے ساتھ ساتھ جنوبی ایشیا کے رسم و رواج وغیرہ بھی پڑھائے جاتے ہیں۔ لیکن افسوس کے ساتھ یہ ماننا پڑتا ہے کہ جاہان میں اردو زبان اور اس علاقہ کے بارے میں، جہاں اردو بولی جاتی ہے، صحیح طور پر نہیں جانا جاتا ہے۔ ۱۹۹۸ء میں جب پاکستان نے ایٹمی تجربہ کیا اور ۲۰۰۱ء میں ۱۱ ستمبر کا واقعہ ہوا تو اچانک پاکستان اور جنوبی ایشیا کے متعلق خبریں جاہان تک پہنچنے لگیں۔ اس بات کو مد نظر رکھتے ہوئے ہمارے شعبہ کو اردو اور پاکستان کے بارے میں صحیح معلومات فراہم کرنے کا، اور سمجھنے کی مدد کرنے کا کردار ادا کرنا چاہیے اور یقین ہے کہ ہم ہی یہ کردار ادا کر سکتے ہیں۔